

モンテーニュの死に対する方法

—二つの相反する方法の共通性—

奥村 真理子

モンテーニュは、人生の最後の20年間に執筆・出版・増補修正を繰り返した『エッセー』に、「人間とは何か」、「いかに生きるか」を真摯に問い考え続ける彼の思索を記録した。もとより、彼は哲学的体系作りなど念頭になく、自己の判断の試み《essais》を記していったのであり、そこには変化が生じることがある。モンテーニュはそのような変化をも率直に認め、公表するのである。

Je ne peints pas l'estre. Je peints le *passage* (...) C'est un contrerolle de divers et muables accidens et d'imaginations irresoluës et, quand il y eschet, *contraires* : (III, 2, p. 805, b)¹⁾

「推移」*passage*、「未解決で時には相反する（*contraires*）思想」——これらの言葉に最もよく当てはまるもののひとつは、モンテーニュの死に対する方法——〈死をあらかじめ考える方法〉と〈死を考えない方法〉——であろう。

*
**

死に対し、最初にモンテーニュが選んだ方法は〈死をあらかじめ考える方法〉である。この方法は第I巻第20章《Que philosopher, c'est apprendre à mourir》で表明されている。

Si c'estoit *ememy* qui se peut éviter, je conseilerois d'emprunter les *armes* de la cotiardise. Mais puis qu'il ne se peut, (...) aprenons à le *soutenir de pied ferme*, et à le *combattre*. (I, 20, p. 86, a)

死が避けられる敵だったら臆病という武器を借りて逃げ出したって構わないが、それができない以上、足を踏んばって死と戦うことを学ぼう——モンテーニュ

は死を不可避の敵、戦いの相手とみなしている。では、臆病という武器が通用しないのなら、どういう戦略が可能なのか。上に引用した文章に続いて、モンテーニュは自分が採用する手段を語る。

Et pour commencer à luy oster son plus grand avantage contre nous, prenons voye toute contraire à la commune. Ostons luy l'*estrangeté*, pratiquons le, accoustumons le. N'ayons rien si souvent en la teste que la mort. A tous instants representons la à nostre imagination et en tous visages. Au broncher d'un cheval, à la cheute d'une tuille, à la moindre piqueure d'espleingue, remachons soudain : Et bien, quand ce seroit la mort mesme ? et là dessus, *roidissons nous et efforçons nous*. (ibid., a)

死という敵の最大の有利である珍らしさ《*estrangeté*》を奪い取るために、常に死を想い描こう、ちょっとしたきっかけを捕えて「さて、これが死そのものだったら？」と反芻することで、自分を堅く強くしよう——先に引用した文中の《*ennemy*》、《*armes*》、《*soutenir de pied ferme*》、《*combattre*》》に続いて《*roidissons nous et efforçons nous*》という表現が用いられることで、戦いやその訓練を連想させる言葉使いとなっている。この部分のみならず、この章全体のうち、死を常に考えることによって死と戦うことを学ぶことを述べる文章には、戦いにまつわる比喩が多く使われている。まるで戦いをひかえた戦士の勇気を鼓舞し実習の積み重ねを促す言葉のようである。そこには、セネカが『ルキリウス宛の手紙』の中で青年に「死を考えよ」と説得している語調の影響が認められる。²⁾

まさにこの実習を題名にしているのが第II巻第6章《*De l'exercitation*》である。この章の冒頭文でモンテーニュは実習の必要性を語っている。

Il est malaisé que le discours et l'instruction, encore que nostre creance s'y applique volontiers, soient assez puissantes pour nous acheminer jusques à l'action, si outre cela nous n'exerçons et formons nostre ame par experience au train auquel nous la voulons renger : autrement, quand elle sera au propre des effets, elle s'y trouvera sans doute empechée. Voilà

pourquoy, parmi les philosophes, ceux qui ont voulu atteindre à quelque plus grande excellence, ne se sont pas contentez d'attendre à couvert et en repos les rigueurs de la fortune, de peur qu'elle ne les surprint inexperimentez et nouveaux au combat ; (II, 6, p. 370, a)

要約すれば、理論と教育だけでは実際に行為を行なうには不十分で、練習・経験を積まなければならないということである。理屈や理論よりも実例や経験を重視するモンテーニュらしい考え方である。しかし、死の実習が可能だろうか。死は一度しか経験できない。ここでもまた「戦い」《combat》という言葉が用いられているが、死に臨む者は皆、「初陣に臨む者」《nouveaux au combat》であり、「新前」《apprentifs》(ibid., p. 371, a)である。だが、いく分かでも死に慣れ、死を経験する方法はあるとモンテーニュは考え、死と似ている睡眠や気絶を引合いに出す。眠りにつく時や気絶する時は意識と感覚がなくなるから、死が近づく時の状態に似ている。しかも、我々が恐れているのは死そのものではなく実は死の接近なのだ。死の接近なら、これと似ている睡眠や気絶によって経験可能だ、というのである。これは、モンテーニュ自身の体験を踏まえて語られた言葉である。ある日、落馬して失神し、仮死状態に陥った後、わずかに感覚と意識を回復し無意識と意識の間にあった時の記憶をモンテーニュは詳細に書いている。

Il me sembloit que ma vie ne me tenoit plus qu'au bout des lèvres : je fermois les yeux pour ayder, ce me sembloit, à la pousser hors, et prenois plaisir à m'alanguir et à me laisser aller. C'estoit une imagination qui ne faisoit que nager superficiellement en mon ame, aussi tendre et aussi foible que tout le reste, mais à la verité non seulement exempte de desplaisir, ains meslée à cette douceur que sentent ceux qui se laissent glisser au sommeil. (ibid., p. 374, a)

自分が死んでゆくのをぼんやりと意識しながら、それを自ら助けるかのように目を閉じたまま逝くがままになる快感、とろとろと眠りに滑り込んでゆくような心地良さ。ほとんど死にかけてのに恐怖感も不快感も全くなく、おだやかな

心地良さを感じたこの体験から、モンテーニュは教訓を引き出す。

à la vérité, pour *s'apivoiser* à la mort, je trouve qu'il n'y a que de
s'en *avoisiner*. (ibid., p. 377, a)

死に慣れるには死に近づくしかない。第I巻第20章における、死を常に思い描くことによって死と付き合い、慣れる方法の有効性を、自己の体験に基づいて確認し確信するのである。

『エセー』初版（1580年出版）の最終章である第II巻第37章でも、モンテーニュは自己の経験から自分の採用した方法の有効性を再確認し、これにさらに期待している。モンテーニュは、当時命取りの病気だった腎臓結石にかかったのだが、その強烈な発作に襲われても、常日頃から苦痛や死に対し準備してきたおかげで自分を失うことなく堪えている。しかも、そこに利益さえ見出している。

J'ay au moins ce profit de la cholique, que ce que je n'avois encore peu sur moy pour *me concilier* du tout et *m'accointer* à la mort, elle le parfera: car d'autant plus elle me pressera et importunera, d'autant moins me sera la mort à craindre. (II, 37, p. 760, a)

この発作の苦しみのおかげで死と完全に仲直りして親しく交われそうだ《*me concilier du tout et m'accointer à la mort*》。ここにはもはや、死を敵と呼び、勇気を鼓舞するような、あの緊張感を伴った語調がない。死が交友関係を結べそうな隣人となりつつあるのだ。

*

ところが、1588年出版の第III巻でモンテーニュはこれまでの方法を批判し、否定し、全く逆の方法を持ち出す。〈死を考えない方法〉である。

第III巻第4章《*De la diversion*》は、「気散じについて」という題名のとおり、辛い気持ちを癒すには心を他の事へ向けるのが良いことを述べる章である。死についても同様である。

Cette autre leçon est trop haute et trop difficile. C'est à faire à ceux de la première classe de s'arrester purement à la chose, la considerer, la

juger. Il appartient à un seul Socrates d'*accointer* la mort d'un visage ordinaire, s'en *apivoiser* et s'en *jouer*. Il ne cherche point de consolation hors de la chose ; le mourir luy semble accident naturel et indifferant ; il fiche là justement sa veüe, et s'y resoult, sans regarder ailleurs. (III, 4, p. 833, b)

「あの別の教訓」（「死を想え」という教訓）はあまりに高邁で難しい、ソクラテスのような第一級の人だけが死と付き合い《*accointer*》、死になれ親しみ《*s'apivoiser*》、死と戯れる《*se jouer*》ことができる、ということは、普通の人間である私にはできないという告白であろう。動詞《*(s')ap(p)rivoiser*》は〈死を常に想うことによって死に慣れる方法〉についてモンテーニュが語る時、用いていた語である。《*s'ap(p)rivoiser de la mort*》という行為をソクラテスのような人にもみ属するものとして、それまで支持してきた方法を放棄しているのだ。また、死と親しく付き合う《*accointer*》という動詞は、先程引用した、第II巻第37章における、死と親しく交われそうだという期待を語った文章の中で代名動詞として用いられていた。この期待も否定されたのである。

第III巻第12章《*De la phisionomie*》で、モンテーニュはさらに明確に、かつの〈死を考える方法〉を批判し、拒否し、〈死を考えない方法〉を採用することを断言する。

ペストが猛威を振るう中、庶民が、死が普遍で不可避の宣告であると悟ってこの必然に身を委ねるように、怖がる様子もなく平然と死を待っている姿。モンテーニュはそこに不屈の模範を見たこと（III, 12, p. 1048, b）を理由に、苦痛や死への準備を唱える学問を辛辣に批判する。

A quoy nous sert cette curiosité de preoccuper tous les inconvenients de l'humaine nature, et nous preparer avec tant de peine à l'encontre de ceux mesme qui n'ont à l'avanture point à nous toucher ? (ibid., p. 1050, b)

第II巻第37章では、結石の発作に堪えられるのは日頃から準備してきたおかげだと、〈準備する〉ことの有効性を確認していたのに、ここでは、不幸に備え

て何になろうか、と否定している。〈死への準備〉についても、

Il est certain qu'à la plus part la preparation à la mort a donné plus de tourment que n'a faict la souffrance. (ibid., p. 1051, b)

と、大部分の人にとっては死そのものよりも辛いことを断言する。さらにモンテーニュは、〈不幸への準備〉の有益性を評価するどころか、それを教える学問の有害性を断罪する。

la science, essayant de nous armer de nouvelles deffences contre les inconveniens naturels, nous a plus imprimé en la fantasie leur grandeur et leur pois, qu'elle n'a ses raisons et subtilitez à nous en couvrir. (ibid., p. 1039, b)

つまり、〈不幸への準備〉を教えようとする学問は、不幸について実に詳細に余す所なく述べたてるので、かえって不幸の重大さを印象づけてしまう。不幸に対する強さと自信を養うどころか、恐怖心を掻き立ててしまうのである。むしろ、ベストに襲われたあの農民たちが〈死への準備〉など知らなくとも不屈の模範を示したように、我々は自分自身の中に不幸や死に対して役立つ、本物の、自然の理論を見出だすことができることをモンテーニュは確信する。

Recueillez vous ; vous trouverez en vous les arguments de la nature contre la mort, vrais, et les plus propres à vous servir à la nécessité : ce sont ceux qui font mourir un paisan et des peuples entiers aussi constamment qu'un philosophe. (ibid., p. 1039, b)

こうしてモンテーニュは、自然の教えに従って死を考えない「愚鈍学派」《*escolle de bestise*》(ibid., p. 1052, b) を提唱するのである。

*
**

〈死を考える方法〉から〈死を考えない方法〉へ。確かに正反対の方法への転換である。だが、これらの方法においてモンテーニュが求めたものは、決して正反対のものではない。

第Ⅲ巻第12章で、モンテーニュが〈死を準備する方法〉を批判し学問を槍玉

にあげる言葉の中に、次のような言葉がある。

Il ne nous faut guiere de doctrine pour *vivre à nostre aise*. (ibid., p. 1039, b)

《*vivre à nostre aise*》「安楽に生きる」——自然に従う「愚鈍学派」にいかにも相応しい生き方である——と《*bien vivre*》「よく生きる」は、モンテーニュが終始求めてきた生き方なのである。

〈死を考える方法〉を述べる第I巻第20章の題名、《*Que philosopher, c'est apprendre à mourir*》および、その冒頭文にキケロの言葉として紹介されている《*Philosopher ce n'est autre chose que s'aprester à la mort.*》(I, 20, p. 81, a. イタリックはモンテーニュ)という言葉はそもそも、プラトンの対話篇『パイドン』にソクラテスの言葉として記されている。その意味は、プラトンが語らせるソクラテスの言葉によれば、哲学することとは魂を肉体から解放しようとすることであり、魂の肉体からの解放と分離が死なのだから、哲学することとはまさに死の練習である、というものである。³⁾ モンテーニュも、哲学の定義の一つとして当時一般的に知られ、通用していたこの意味を、一応述べる。しかし、それは上記の冒頭文に続く短い一文においてだけで、その直後に、すかさず自分なりの解釈を行ない、そこからこの章を展開しているのである。

ou bien, c'est que toute la sagesse et discours du monde se resolt en fin à ce point, de nous apprendre à *ne craindre point à mourir*. De vray, ou la raison se mocque, ou elle ne doit viser qu'à nostre contentement, et tout son travail tendre en somme à nous faire *bien vivre, et à nostre aise*, comme dict la Sainte Escriture*. Toutes les opinions du monde en sont là, quoy qu'elles en prennent divers moyens; *autrement on les chasseroit d'arrivée*: car qui *escouteroit celuy qui pour sa fin establiroit nostre peine et mesaise**? (ibid., a) ⁴⁾

哲学が、我々に死を恐れないように教えてくれ、我々がよく生き、しかも楽しく生きる《*bien vivre, et à nostre aise*》ことを目指していると思うからこそ、モンテーニュは哲学に耳を傾けるのである。さもなければ「始めから追い払っ

てしまうだろう」、「誰が我々の苦しみを目的とする人々の言説など聞くだろう」とまで言い放っている。

もちろん、《bien vivre》に伴う《bien mourir》が、第三巻の時期よりもこの時期のモンテーニュにとって比重が大きかったことは確かであるが、これほど強調されている《bien vivre, et à nostre aise》に対する強い願望を軽視することはできない。モンテーニュにとっては、哲学そのものが目的なのではなく、死を恐れず、満足して、よく、楽しく生きることが目的であり、それが哲学の目的と一致していると彼は考えているのである。哲学は、まず第一に、この目的のためにモンテーニュが選択し得る手段のひとつだったのだ。もし、他により有効だと思える方法があれば、そちらを選んだであろう。このことは次の文章にはっきりと表われている。モンテーニュは、死を考えることに対する、「死を苦しめなければよい」という反論を想定して、以下のように答えている。

Qu'import'il, me direz vous, comment que ce soit, pourveu qu'on ne s'en donne point de peine? Je suis de cet advis, et en quelque maniere qu'on se puisse mettre à l'abri des coups, fut ce sous la peau d'un veau, je ne suis pas homme qui y reculasse. Car il me suffit de passer à *mon aise* ; et le meilleur jeu que je me puisse donner, je le prens, si peu glorieux au reste et exemplaire que vous voudrez, (ibid., pp. 85-86, a)

死の恐怖に脅えることなく安楽に過ごすという、この私の目的にかなう最も有効な手段ならば、それを採用する、と断言しているのだ。ここでもまた、「私は安楽にすごせれば十分だ」と、《à mon aise》という言葉を用いていることに注目しよう。《vivre à mon aise》は、モンテーニュが第三巻執筆期に初めて抱くようになる幸福観ではなく、すでにこの時期、はっきりと強く抱いている幸福観なのだ。また、この章や第I巻第14章《Que le goust des biens et des maux depend en bonne partie de l'opinion que nous en avons》、第I巻第39章《De la solitude》などを代表例として、『エッセー』執筆初期におけるモンテーニュのストア主義的側面が強調されがちだが、「どんなに不名

誉な模範的でない《si peu glorieux au reste et exemplaire》手段」だって構わないと、ストア主義的でも哲学的でもない、普通の人間としての心情を言っているのだからである。

ただ、〈死を考えない方法〉では、いざ死に直面した時恐怖に捕えられてしまう、とこの時期のモンテーニュは考えていた。

Mais aussi quand elle [la mort] arrive, ou à eux, ou à leurs femmes, enfans et amis, les surprenant en dessoude et à decouvert, quels tourmens, quels cris, quelle rage, et quel desespoir les accable? Vites-vous jamais rien si rabaissé, si changé, si confus? (ibid., p. 86, a)

モンテーニュは実際に何度もこのような光景を見ていたようである。彼はこの章の最後に、恐怖と戦慄に包まれた臨終の場面を具体的に描いている。墓地のフレスコ画や木版画や劇にまで用いられたモチーフ「死の舞踏」や、信心深い死への提要書「^{アルス・モリエンディ}往生術」の流行に見られるように、アリエスによれば、自然に死を受け入れていた伝統的な死との親しさが、中世の中頃以後部分的に失われてゆき、特に富者・権力者・知識人にとって、死はもはや恐怖と無関係な「飼い馴らされた死」《mort apprivoisée》ではなくなっていったという。⁵⁾ モンテーニュの周囲の人々もまた、例外ではなかったのだろう。上の引用文中の《Vites-vous》における「あなた(方)」はそのような社会に生きるモンテーニュ自身であり、『エッセ』の読者たちであって、死を自然に受け入れて穏やかに死んでゆく人々——第I巻第20章の最後にモンテーニュが言及している、死を恐れずに甘受できる身分の低い人々——の社会に生きている人間ではないのである。

「死を気にしなくとも何とかなる」と思いたいのはやまやまだが、それは考えられない。何か他に良い方法はないか。死の時も含めて安楽にすごし、恐怖に戦慄することなく生涯を終えることのできる有効な方法を求めるモンテーニュのこの心情を無視するべきではない。

*

第I巻第14章《Que le goust des biens et des maux depend en bonne partie

de l'opinion que nous en avons》で、モンテーニュは、死や苦痛などの不幸がそれ自体で不幸なのではなく、人間の考え方・見方のせいで苦しいものとなることを、様々な実例と哲学の諸説をとおして自分なりに検討してみた後、死を軽視し苦痛に堪えられるようになるために自分に役立ち、自分に合う説を選ぼう、と結論する。

Or sus, pourquoy de tant de discours, qui persuadent diversement les hommes de mespriser la mort, et de porter la douleur, n'en trouvons nous quelcun *qui face pour nous*? Et de tant d'especes d'imaginacions, qui l'ont persuadé à autruy, que chacun n'en applique il à soy une le plus *selon humeur*? S'il ne peut digerer la drogue forte et abstersive, pour desraciner le mal, au moins qu'il la preigne lenitive, pour le soulager. (I, 14, p. 67. a)

「自分に役立つ方法」・「自分の気質に合った方法」を選択しようとする態度がここに明らかに表明されている。しかも、「不幸を根絶する強い下剤を飲めないなら、それを緩和する鎮痛剤を飲め」という言葉は、高邁な理想を求める哲学者の態度ではなく、自己の能力を考慮する態度を表している。

したがって、第I巻第20章《Que philosopher, c'est apprendre à mourir》でモンテーニュが選択している〈死を常に想像することによって死に慣れる方法〉は、彼自身にとって役立ち、彼自身の気質に合う方法だったはずである。少なくとも、その時のモンテーニュはそう考えたはずである。すでに引用したもののだが、この方法を述べる文章を敢えてもう一度引用しよう。

Et pour commencer à luy [ennemy = mort] oster son plus grand advantage contre nous, prenons voye toute contraire à la commune. Osons luy l'estrangeté, pratiquons le, accoustunons le. N'ayons rien si souvent en la teste que la mort. A tous instans representons la à nostre *imagination* et en tous visages. (I, 20, p. 86, a)

「まず手始めに」《pour commencer》という言い方に、最初からいきなり難しい方法で真っ向から死に立ち向かおうとするわけではない、というニュアンスを読み取ることができる。物事はそれ自体が不幸ではないが、我々の見方・

考え方によって不幸に感じられることを第 I 巻第 14 章で検証したモンテーニュは、死の恐怖もまた、死そのものからではなく、死の珍らしさ《*étrangeté*》、つまり我々が死というものに慣れていないという事実から生じることに目をつけ、まず、この「珍らしさ」という「死の最大の有利」《*son plus grand avantage*》を取り除こうとする。事物から珍らしさを取り除くにはどうすればよいか。頻繁に接して慣れてしまえばよいのだ——《*pratiquons le, accoutumons le*》。

しかし、死に慣れると言っても、一人の人間が死を何度も体験するわけにはいかないから、モンテーニュは死を常に想像しようと言う。想像《*imagination*》が人間に働きかける影響力をモンテーニュは実感している。第 I 巻第 21 章《*De l'imagination*》の冒頭でモンテーニュは、

《*Fortis imaginatio generat casum*》, disent les clercs. Je suis de ceux qui sentent *tres-grand effort* de l'imagination. (I, 21, p. 97, a. ラテン語文のイタリックはモンテーニュ)

と語り、想像の「絶大な威力」《*tres-grand effort*》の例を集めている。しかも、冒頭文の直後に挿入された加筆 c では、モンテーニュ自身、いかに想像に敏感であるかを詳しく書いている。したがって、モンテーニュには、自分にとって、死の想像が現実にも迫れる程の効果を持つものであるという確信があったのだ。

また、モンテーニュは習慣というものに非常に興味を持っており、その力の強さを数多くの実例と自己の体験から痛感している。このことは『エッセ』の多くの箇所に見られるが、習慣を特に扱った章は第 I 巻第 23 章《*De la coutume et de ne changer aisément une loy receuë*》である。ここでモンテーニュは、習慣が人間の肉体的感覚を鈍らせる例を列挙した後、精神に及ぼす影響力はさらに大きいと前置きして、これに当てはまる例を色々と挙げるのだが、その中に次のような例がある。

Et ce que toute la philosophie ne peut planter en la teste des plus sages, ne l'apprend elle pas de sa seule ordonnance au plus grossier vulgaire? car

nous sçavons des nations entieres, où non seulement la mort estoit mesprisés, mais festoyée ; (I , 23, pp. 114-115, a)

習慣であるというだけで、国民全体が死を軽視し、喜ぶ。しかも、これは「哲学が総掛かりでも最も賢明な頭脳にさえ植えつけることのできないこと」と評している。習慣の力は哲学の理論の力を上回ることさえできる、という認識である。

このように偉大な想像と習慣の力を利用すれば、逆に言えば、想像にたやすく影響され、習慣によって感覚も精神も鈍らされてしまう人間の弱点を利用すれば、死の珍らしさがなくなり恐怖感も弱まっていくだろう。モンテーニュはそれを見込んでいる。

Il est impossible que d'arrivée nous ne sentions des piqueures de telles imaginations. Mais en les maniant et repassant*, au long aller, on les aprivoise sans doubte. (I , 20, pp. 87-88, a)⁶⁾

「死というものに慣れよう」という発想は、想像と習慣の力、あるいはこれらに支配されやすい人間本来の弱さを利用しようとするものであり、しっかりと自己制御力を持つ賢者ではない普通の人間に役立つ有効な方法なのである。

*

この方法はモンテーニュの気質に合う方法でもある。

モンテーニュには若い頃から死を想像する癖があった。モンテーニュはこのことを、〈死を想像する習慣〉について述べた後、《nature》の手助けがなければ技術・技巧の前進は困難であるという前置きをして語っている。

A la vérité, en toutes choses, si *nature* ne preste un peu, il est malaisé que l'art et l'industrie aillent guiere avant. Je suis *de moy-mesme non melancholique, mais songcreux*. Il n'est rien dequoy je me soye des toujours plus entretenu que des imaginations de la mort : voire en la saison la plus licentieuse de mon aage, (...) *Je ne ridois non plus le front de ce pensement là, que d'un autre.* (ibid., p. 87, a)

しかも、死を考えたからといって、他の考え事と変わらず、「眉をひそめる」

程苦痛ではなかった。つまり、死を絶えず想う習慣は、人間本来の弱さを持つ人間に適していると同時に、夢想家《songecreux》だが憂鬱症《melancholique》ではないというモンテーニュの本来の性癖と気質に合っていたのだ。⁷⁾ だからこそ、技術・技巧〔死を想う方法〕の前進には《nature》の援助が必要であるという前置きをしているのである。⁸⁾ 各人は自己の気質に従って《selon humeur》、苦痛に堪え死を軽視する方法を選べばよいと、第 I 卷第 14 章《Que le goust des biens et des maux depend en bonne partie de l'opinion que nous en avons》で述べたとおり、これまでの経験から自己の性癖・気質に合うと思えたからこそ、この方法を選んだと言えよう。たとえば、もし同じように死を想像する癖があったとしても、憂鬱症で、死の想像に堪え難い陰鬱さを感じていたとしたら、この方法を選ばなかったのではないか。

ところで、モンテーニュは死を常に想う方法の例として、エジプト人が宴会の最中に骸骨を持ち込ませていた話を引き合いに出している (ibid., a)。また、墓地を神殿や人のよく行く場所に置き、骨や墓や葬列を人々に始終見せたという、リュクルゴスの語った話も引き合いに出している (ibid., p. 89, a)。さらに、これはモンテーニュが挙げた例ではないが、15 世紀イタリアのサヴォナローラは《memento mori》「死を想え」という教えを実践するために、人（特に友人）の臨終に立ち会うこと、できるだけ頻繁に葬式に行くこと、自宅に死の絵を描かせること、骨でできた小さな骸骨を持ち歩いてしばしばそれを見ること、自分の肉体がやがて灰となり腐臭を放つのだと自分自身に言うことなどを説いている。⁹⁾ これらはモンテーニュの方法と類似しているが、より直接的な方法であり、より効果的な方法かもしれない。だが、「手始めに」行なうには、特に敏感な人には、心理的衝撃が強すぎるだろう。モンテーニュはエジプト人やリュクルゴスの話を知っているが、これほど直接的な——こう言ってよければ死骸趣味的なところさえある——手段をとってはいない。想像に敏感なモンテーニュには刺激が強すぎるからだろう。病気に苦しむ人を見るだけで肉体的にも影響を受ける程、想像の印象が彼を「突き通す」のだから (I, 21, pp. 97-98, c)。

モンテーニュは、あくまでもできるだけ自分の気質に合った無理のない方法を選ぼうとし、決して極端な手段はとらなかったようである。ただ、意識的に心がけた事はある。

aussi ay-je pris en coutume d'avoir, non seulement en l'imagination, mais continuellement la mort en la bouche ; et n'est rien dequoy je m'informe si volontiers, que de la mort des hommes : quelle parole, quel visage, quelle contenance ils y ont eu ; ny endroit des histoires, que je remarque si attantivement. (c) Il y paroist à la farcissure de mes exemples: et que j'ay en *particuliere affection* cette matiere. (I. 20, p. 90, a, c)

ひとつは、死を想像するだけでなく、それを口に出す習慣をつけたことであるが、これは自分の癖を助長することである。もうひとつは、人の臨終の際の言葉・顔つき・態度がどうであったか知ろうとすることであり、歴史書を読む時にもこれを注意深く読むことである。だが、これはモンテーニュが「特別の好み」《*particuliere affection*》を持っているテーマなのだ。この言葉は後年の加筆部分に属するが、この章の初版の文章を書いていた時期にもそうだったと考えてよいだろう。若い頃から死を想像する癖があったのは、死に興味があった証拠である。また、初版『エッセー』の随所に様々な人の死の様子が実に数多く描かれているからである。

確かに第I巻第20章とセネカの『ルキリウス宛の手紙』との関係は否定できない。セネカのラテン語文をほとんどそのままフランス語に訳したような文章さえ少なくない。「死を恐れなために常に死のことを考えよ」という言葉はセネカの第30書簡に見られる。¹⁰⁾ また、この書簡集でセネカが頻繁に引き合に出しているエピクロス思想と共通する点が多いことも確かである。¹¹⁾ 事実、セネカは第26書簡で「死の練習をせよ」という言葉をエピクロスの言葉としてルキリウスに紹介している。だが、セネカがエピクロスの言葉に自分なりの解釈を与えているのと同様に、モンテーニュも言わばエピクロス発セネカ経由の「死の準備・練習」に自分なりの「判断の試み」を行なった上で採用し

ているのである。¹²⁾ これまで考察してきたように、モンテーニュは、〈死を常に想像する習慣によって死の珍らしさを取り除き、死を恐れなくなる〉方法が自分にとって役に立ち、自分の気質に合うと思ったからこそ選んだのである。第Ⅲ巻第12章で、「死を考えるな」という自然の教えを擁護する時、モンテーニュは次のように述べている。

Les hommes sont divers en *goust* et en *force* ; il les faut mener à leur bien *selon eux*, et par routes diverses. (Ⅲ, 12, p. 1052, b)

人間各個人の「趣味」と「能力」の違いを尊重して、「各人に応じた」道を選んで幸福へ向かおうとするこの考え方は、すでに第Ⅰ巻第20章の時期にあったのである。

*

さて、「死を想え」という哲学の教えに対する批判を含む第Ⅲ巻第4章《*De la diversion*》における〈気散じの方法〉も〈死を想像する習慣の方法〉と同様、人間の弱さを逆に利用する方法であり、モンテーニュの気質に合う方法である。

〈気散じの方法〉、つまり堪え難い辛さや悲しみを別の事で紛らす方法を、モンテーニュは次のように説明している。

Nature procede ainsi par le benefice de l'*inconstance* : car le *temps*, qu'elle nous a donné pour *souverain medecin de nos passions*, gagne son effaict principalement par là, que, fournissant autres et autres affaires à nostre imagination, il demesle et corrompt cette premiere apprehension, pour forte qu'elle soit. (Ⅲ, 4, p. 836, b)

第Ⅰ巻第20章で〈死を想像する習慣の方法〉を述べた後、彼自身若い頃から死を想像する癖があったことを語る時に《*nature*》に言及したように、ここでも《*nature*》に言及していることに注目しておこう。どんなに強い感情も、時が経つにつれて次第に弱まり薄れてゆく。〈死を想像する習慣の方法〉が想像と習慣の力を利用する方法であるのと同様に、〈気散じの方法〉は時という「我々人間の情念の最良の医者」《*souverain medecin de nos passions*》の力を利

用する方法なのである。また、この医者が有能さを発揮できるのは、人間が常に同じ状態を維持することができず、「移り気」で変わりやすいからである。「移り気（変わりやすさ）」《inconstance》、あるいはその形容詞《inconstant》は、モンテーニュが人間の本性《nature》を形容する時によく用いる言葉である。たとえば第II巻第1章《De l'inconstance de nos actions》でモンテーニュは「不定性」《inconstance》を人間の行為の最も一般的な特徴であるとみなしている。さて、この「移り気（変わりやすさ）」の原因は、人間が事物の本質をとらえることができず、事物の表面に惑わされやすく、心を動かされやすいことである。

Peu de chose nous divertit et destourne, car peu de chose nous tient. Nous ne regardons gueres les subjects en gros et seuls ; ce sont des circonstances ou des images menues et superficielles qui nous frappent, et des vaines escorces qui rejalisent des subjects, (ibid., b)

「つまらぬ事」《peu de chose》、「些細で表面的な事情や形象」《circonstances ou des images menues et superficielles》、事物の「上っ面」《vaines escorces》が我々をとらえるのだ。ならば、どんなに辛く悲しい気持ちも「つまらぬ事」で紛らすことができる。〈死を想像する習慣の方法〉が想像と習慣の力にたやすく支配される人間本来の弱さを逆に利用する方法であると同様に、〈気散じの方法〉はつまらぬ事に惑わされやすい人間本来の弱さを逆に利用する方法なのである。

ところで、モンテーニュは実際に〈気散じの方法〉によってある婦人の悲しみを紛らすことに成功したことがある（ibid., p. 831, b）。また、彼自身も、無二の親友ラ・ボエシを失った時、「わざと」《par art》「故意に」《par estude》（ibid., p. 835, b）恋を漁ることで、強烈な悲痛を紛らした。ラ・ボエシの死は1563年、モンテーニュが30歳の時である。恋を漁るという気散じには若さも手伝ったという（ibid., b）。つまり〈気散じの方法〉はモンテーニュが若い頃から知っていた方法なのである。この方法を用いたのは、この場合に限らなかつたようだ。

Par tout ailleurs de mesme : une aigre imagination me tient ; je trouve plus court, que de la dompter, la changer ; je luy en substitue, si je ne puis une contraire, au moins un'autre. Tousjours la variation soulage, dissout et dissipe. Si je ne puis la combatre, je luy eschape, et en la fuyant je fourvoye, je ruse : muant de lieu, d'occupation, de compaignie, je me sauve dans la presse d'autres amusemens et pensées, où elle perd ma trace et m'esgare. (ibid., pp. 835-836, b)

「他の場合にもいたる所で」《par tout ailleurs》〈気散じの方法〉を用いてきたのである。そしてそれは「いつも」《tousjours》成功した。〈死を想像する習慣の方法〉がモンテーニュの若い頃からの癖を助長するものだったのと同様に、〈気散じの方法〉もモンテーニュが若い頃から有効性を確認し、様々な場合に適用してきた気分転換の上手さを利用するものなのである。

気分転換の上手さには、モンテーニュの変化と多様性を好む気質が手助けをしている。第Ⅲ巻第9章《De la vanité》でモンテーニュは《la seule variété me paye, et la possession de la diversité》と告白している（Ⅲ, 9, p. 988, b）。また、興味の広さも気分転換の上手さにつながる。モンテーニュの興味の広さは、『エッセー』の中で扱われているテーマと引き合いに出されている例の多種多様さを見れば明らかである。

したがって、〈気散じの方法〉は、時の力と些細な事に惑わされやすい人間本来の弱さ・愚かさという《nature》を利用する方法であるとともに、モンテーニュが若い頃から有効性を認識し、適用してきた気分転換の上手さと、変化と多様性を好み、興味の広い彼自身の気質・性質《nature》に合う方法なのである。

*

これまで考察してきたように、〈死を想像する習慣の方法〉も〈死を考えない方法〉と同様、安楽に生きるために人間の本性を利用し自己の性質に合う方法を選ぶという共通の発想法によっていたはずである。では、なぜモンテーニュは〈死を想像する習慣の方法〉を放棄したのか。モンテーニュの死の見方に予

想外の変化が生じたのである。

Je voyois nonchalamment la mort, quand je la voyois *universellement*, comme fin de la vie ; je la gourmande *en bloc* ; *par le menu*, elle me pille. Les larmes d'un laquais, la dispensation de ma desferre, l'attouchement d'une main connue, une consolation commune me desconsole et m'attendrit. (III, 4, p. 837, c)

総括的な見方（《*universellement*》、《*en bloc*》）しかしていなかったモンテーニュの死の見方に、個々別々の見方（《*par le menu*》）が生じたのである。第I巻第20章で〈死を想像する習慣〉を死を恐れなくなるための方法として選び、その有効性を第II巻第6章《*De l'exercitation*》で落馬の経験によって再確認し、初版最終章第II巻第37章で「死との完全な仲直り」を期待していた頃のモンテーニュは、死を総括的にのみ見ていたのだ。総括的な死の見方に関して言えば、モンテーニュの死の認識は第I巻第20章においても第III巻第12章においても同じである。第III巻第12章における、死が生と同じく我々の存在の本質であり、自然の営みの重要な一部であるという、自然の摂理としての死の認識は、すでに第I巻第20章の後半における「母なる自然の教え」と同一のものである。¹³⁾ところが、死が「個々別々の」姿も現わすようになったのである。上の引用文の後半における召使いの涙などは、第I巻第20章の最後では、ただ「ものものしい儀式」《*equipage*》、死という事物の本質ではない「仮面」《*masque*》として描かれていたのに（I, 20, p. 96, a）、ここではモンテーニュの安楽を乱す〈死の個々別々の姿〉になっているのだ。モンテーニュがこのような見方をするようになったために、死の想像が辛いものになってしまったのである。

逆に、第I巻第20章の「ものものしい儀式」という「仮面」の下に見出だされる「身分の卑しい者たちが少しも恐れることなく甘受したのと同じ死」（*ibid.*, a）が、当時のモンテーニュには、〈死の準備〉なしに得られるものだとはとも考えられない、悲観せざるを得ないことだったのである。それは、すでに述べたように、死がもはや「飼い馴らされた死」ではなくなり、死への恐怖が充満していた社会に生きていたモンテーニュにとって信じ難いことだったのである。

このような認識の変化がモンテーニュの中に起こり、彼は〈死を想像する習慣の方法〉が彼自信にとって役に立たず、合わないものであることを認識するに至ったのである。

*
**

〈死を考える方法〉は確かに〈死を考えない方法〉と相反する方法であり、結果的には、死を恐れずに安楽に生きる目的の役に立たない、モンテーニュに合わない方法であった。しかし、少なくとも、この方法を選択した時のモンテーニュにとっては自分に有効で、自分に合うと思えたのである。単純に、ストア哲学あるいはセネカに傾倒して盲従したわけではない。〈死を考えない方法〉の土台である、人間の本性を認識し、各人の個性を尊重する考え方が、すでに〈死を考える方法〉を支えていたのである。この意味で、〈死を考える方法〉と〈死を考えない方法〉とは、いずれも、死の恐怖に怖えることなく安楽に生きるために、人間の本性の弱さ・愚かさと自己の個性を認識してそれらに合う方法を選ぼうとするという、共通の発想法の上に成り立つものだったのである。『エッセー』執筆初期のモンテーニュの中に、晩年の「自然に従う」知恵の土台がすでにあったと言えよう。

注

- 1) 『エッセー』の引用は *Les Essais de Montaigne, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux par Pierre Villey, rééditée sous la direction et avec une préface de V.-L. Saulnier*. Presse Universitaire de France, 3^e éd, 1978. による。なお、III, 2, p. 805 は第III巻第2章p.805を示し、末尾の a, b あるいは c はそれぞれ、a = 1580年版、b = 1588年版、c = 1588~1592年の加筆を意味する。引用文中のイタリックは特に断りのない限り引用者。
- 2) VILLEYは『エッセー』執筆初期のモンテーニュがセネカのストア主義に魅了されており、セネカの思想だけでなく、その凝縮された、強い印象を与える文章を仏訳あるいは模倣していると述べている。VILLEY, Pierre, *Les Sources et l'évolution des "Essais" de Montaigne*. Librairie Hachette, 1908, t. 2, chap. 2, p. 45, pp. 55-60.
- 3) 『パイドン』66 C-67 E, 80 E-81 A. (田中美知太郎・藤波令夫編集, 『プラトン全集』1, 岩波書店, 1975, pp. 187-189, pp. 234-235)

- 4) 《Ecriture》および《peine et mesaise》は実際には1588年以後のテキストに属する。初版のテキストではそれぞれ《parole》、《tourment》(cf. Michel Eyquem de Montaigne, *Essais, reproduction photographique de l'édition originale de 1580, publiée par Daniel Martin. Slatkine-Champion, 1976, t. I, p. 96.* 以下、D. M. と略記)。ここで我々に直接関係があるのは後者の訂正で、意味に大きな変化はないと思われるが、《aise》に否定の意を示す接頭辞《més-(mes-)》を付けた《mesaise》という語を用いることによって《aise》との対比が明確になったと言えよう。
- 5) ARIÈS, Philippe, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du Moyen Age à nos jours.* Ed. du Seuil, coll. 《Points Histoire》, 1975, pp. 21-50.
- 6) 《repassant》は実際には1588年以後のテキストに属する。初版のテキストでは《pratiquant》(D. M. t. I, p. 108)。《repassant》の方が反復行為を強調している。
- 7) 死を考えることがモンテーニュの生来の傾向に合っていたことは、DRÉANOも指摘している。DRÉANO, Maturin, 《Montaigne et la préparation à la mort》, in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance. XXII: 1960, n° 1, p. 152.*
- 8) 《nature》は、ここではまず、モンテーニュの「生来の性質」という意味である。だが、この引用文の直後にある、我々が前節の最後に引用した「始めは死の想像が辛いかもしれないが、そのうちに慣れるはずだ」という主旨の文章を考慮に入れば、第二の意味として、習慣に左右されやすい「人間の本性」という意味も同時に含んでいると考えられる。
- 9) TENENTI, Alberto, *La Vie et la mort à travers l'art du XV^e siècle.* Ed. Serge Fleury, coll. 《La Muse du Temps》, 2^e éd., 1983, p. 71.
- 10) 《tu tamen mortem ut numquàm timeas, semper cogita.》Sénèque, *Lettres à Lucilius.* Société d'Édition 《Les Belles Lettres》, 1976, t. I, p. 136.
- 11) ARMAINGAUDはモンテーニュとエピクロスの思想的共通性から、モンテーニュは終始一貫エピキュリアンだったと述べている。ARMAINGAUD, Arthur, 《Y a-t-il une évolution dans les Essais?》, in *Bulletin de la Société des Amis de Montaigne.* 1^{re} série, n° 2, 1913, pp. 117-160, et n° 3, 1914, pp. 254-265.
- 12) JANSENはモンテーニュがセネカの徳・死・苦痛・財産などに関する思想に対して与えた解釈を《solutions qui (...) ne portent pas moins une teinte particulière due aux expériences et au travail méditatif de celui qui le reproduit.》と評している。JANSEN, F. J. B., *Sources vives de la pensée de Montaigne.* Levin & Munksgaard-Librairie Félix Alcan, 1935, p. 66.
- 13) Cf. III, 12, p. 1055, b, c. I, 20, pp. 92-96, a. この点に関してはBRODY, Jules, *Lectures de Montaigne.* French Forum, Publishers, 1982, chap. IV. 特に p. 124 を参照されたい。

Montaigne face à la mort :
commun dénominateur de deux attitudes opposées

Mariko OKUMURA

Montaigne a conçu deux façons d'envisager la mort et ces deux façons sont en apparence diamétralement opposées. La première est de s'habituer à la mort en l'imaginant sans cesse. C'est de cette façon que les stoïciens avaient coutume de se préparer à la mort. La seconde est de se refuser à y penser. Mais au fond ces deux façons ont un commun dénominateur. La seconde façon de renoncer à se préparer à la mort inéluctable est de tenir compte de la nature humaine et des particularités de chaque individu pour arriver à «vivre à son aise». Il en est de même de la méthode de «diversion». Elle est fondée sur l'inconstance et la faiblesse humaines. Car les choses les plus triviales arrivent à détourner l'attention de l'homme et à atténuer la douleur suscitée par la pensée de la mort. D'ailleurs Montaigne se servait de cette deuxième méthode quand il avait des pensées tristes ou quand il était tourmenté. Toujours dans le but de «vivre à son aise», la première méthode consiste à profiter des ressources de l'imagination qui rend sensibles les choses irréelles et leur confère apparence et couleurs, et de ce qu'on appelle de la force de l'habitude, de cette accoutumance qui détourne l'attention de la routine de la vie quotidienne et rend insensible à tout ce qui se répète. On peut faire appel à l'imagination pour en éprouver d'avance la peur de la mort et pour s'y habituer. Autrement dit, cette méthode est un recours à la faiblesse humaine, sensible aux effets de l'imagination et de l'accoutumance. De plus, la première méthode avait les

suffrages de Montaigne, car depuis son adolescence il avait coutume de penser régulièrement à la mort, sans en éprouver de mélancolie. C'est pourquoi Montaigne choisit toujours, même à l'époque dite «stoïcienne», une méthode qui convienne à la nature humaine et à sa propre nature pour «vivre à son aise». Dès ses premiers essais, Montaigne obéissait à ce principe fondamental de sa philosophie qui est de «suivre la nature».